

令和4年度 教育課程特例校実施状況(自己評価・学校関係者評価)

聖隷クリストファー小学校は、日々変化を遂げる国際社会の中で活躍するために必要な高い英語力と能力・知識を備えた人材を育成するため、国語科及び社会科の教科以外の授業を外国人教員による英語で行う英語イマージョン教育を行うことと、図画工作科、外国語活動の時間、総合的な学習の時間の一部を英語科の時間に充てる教育課程特例校としての認定を受けています。教育課程特例校は、特別の教育課程の実施状況に対する自己評価と学校関係者による評価を毎年公表することになっています。

	評価項目	具体的取り組み	自己評価		学校関係者評価	
			評価	反省と改善策	評価	意見
英語イマージョンで行う特色ある学び	英語イマージョン環境の充実	① 日本人教員と外国人教員の二人による学級指導体制とする。 ② 朝の礼拝時に英語の讃美歌に触れる。 ③ 掲示物等に効果的に英語を用いる。 ④ 英語図書を揃える。 ⑤ 外国人教員は原則的に常に英語を用いる。 ⑥ 教員と児童・保護者間の連絡ツールで英語を用いる。 ⑦ ICT を効果的に用いる。	B	① 日本人教員と外国人教員が、協力して朝の会・帰りの会を行うなど、英語イマージョン環境が確保されてきた。両教員間での意思疎通が徐々に図れるようになってきた。今後はペアを組んでいる教員同士のミーティングの時間をさらに確保していきたい。 ② 賛美歌を英語で歌い、英語に触れる機会を多くもてた。毎朝の礼拝時には、司会児童が英語で全校にアナウンスするようにし、英語を活用する機会を増やしてきた。 ③ それぞれの担任が、英語で児童に作成させた構内掲示物を掲示できるようになってきた。英語での表記が徐々に増え、言語習得を意識した掲示物となりつつある。 ④ 英語の蔵書は段階的に揃える予定であり、令和4年度には、蔵書を増やした。今後、計画的に探究学習の資料になるような書籍を増やしていく。 ⑤ 外国人教員は概ねオールイングリッシュで授業ができた。 ⑥ 外国人教員が英語で学習報告をするなど、有効に活用できていた。今後も継続したい。 ⑦ iPad を用いて英語で表されている学習アプリケーションをどの学年も使用した。	B	児童が英語で記入した掲示物が増え、自然に英語で外国人教員と会話する姿が見られるようになり、英語力が向上していることが確認できた。今後も、この取り組みを続けていただきたい。

※評価点は、A(十分に効果があった)・B(成果があった)・C(少し成果があった)・D(成果がなかった)

	評価項目	具体的取り組み	自己評価		学校関係者評価	
			評価	反省と改善策	評価	意見
英語イマージョンで行う特色ある学び	英語による探究的な学び	<p>① 教科の枠を超えた学びを英語で行う。</p> <p>② 教科学習の中で、英語で探究的学びを展開する。</p> <p>③ 児童の学びに対し形成的評価を行い、個々の英語力に合わせた指導を展開する。</p> <p>④ IB PYP プログラムの導入に伴い、定期的に英語学習と探究学習の研修を行う。</p>	B	<p>① IB PYP(国際バカロレア機構、プライマリー イヤーズ プログラム)の考え方に基づいた POI(教科等横断型探究授業)を実施した。令和4年度は、6つの単元(UOI)を年間計画に位置付け、それぞれの学年で工夫して取り組んだ。今後、学校全体としてめざす児童像をもとにした教育を充実させていきたい。</p> <p>② 英語を用いる教科の中では児童が体験的に英語を身に付けることができていた。</p> <p>③ 形成的評価を実施し、前期・後期と2回に分けて評価シート(Progress Report)を作成し、三者面談を実施した。このことより、児童の実態に応じた英語力の評価とフィードバックが可能になってきた。また、個別最適な学びに関する研修を充実させることが本校教員にとって必要であるという課題が生まれてきた。</p> <p>④ IB PYP プログラムの導入に伴い、定期的に英語学習と探究学習の研修を行うことにより、教員の指導力向上につながってきた。</p>	B	<p>教科内、教科等横断型授業双方について、どのように英語の学習環境を組み入れていくか精査する時期になってきている。英語による探究的な学びで身に付けた英語が、学校生活や体験の中で使われていくことがのぞまれる。</p>

※評価点は、A(十分に効果があった)・B(効果があった)・C(少し効果があった)・D(効果がなかった)